

斑鳩町龍田神社狛犬と多筋扇尾 — 江戸時代浪花狛犬の1グループ —

磯 辺 ゆ う

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部

The Stone Komainu of Tatsuta-jinja (Ikaruga-cho, Nara Pref) and a Group of Naniwa Komainu with the Multi-lined Fan Tails from the Edo Period

Yu Isobe

Naragakuen University Narabunka Women's College

江戸時代、近畿圏では大坂を中心に、石造狛犬奉納の動きが大きなブームとなった。中心的なスタイルは浪花狛犬と呼ばれる形式であるが、その中にもいくつかの型がある。その中で、奈良県斑鳩町龍田神社の狛犬は特徴的な扇尾を持っている。同様な狛犬は大阪府下にいくつか散見されており、龍田神社と合わせて多筋扇尾グループと名付け、ここにそのグループの全てを記載し、比較検討する。

キーワード：石造狛犬、江戸時代、浪花狛犬、多筋扇尾、斑鳩町、龍田神社

1. はじめに

奈良県生駒郡斑鳩町龍田神社狛犬（文化4年1807奉納）は、奈良文化財同好会¹⁾による大きさ、簡単な形状の報告があるが、実は斑鳩町内で調査可能な参道狛犬の中で最古のもの（磯辺未発表）で、ユニークな姿である。しかも作りが丁寧であり、力強い。地方の石工の手になるものというよりは、当時大坂に集まっていた腕の良い石工によるかなり良いものと見る事ができる。奈良県の江戸時代の狛犬は相当数大坂から運ばれてきており¹⁾、特に斑鳩町内は大和川舟運の要と言える王寺から近く、経済的に大坂との関係が深かったと考えられる。この狛犬のルーツを知りたいと考え、その仲間を比較検討した。

大阪府の狛犬については、木村茂氏^{2)~6)}、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺慶昭氏^{8)、9)}による研究が主なものである。木村氏は、大阪府を中心とした江戸時代石造狛犬を観察し、その形と制作した石工集団から狛犬の系統的な分類を試みた。全ての狛犬の観察ではないが、大まかなグループを知ることができる。奈良文化財同好会も、より多くの狛犬を調査し独自に分類した。調査対象は江戸時代だけではなく近年までを含み、さらに参道に出ている狛犬（参道狛犬）だけではなく、本殿縁上に置かれている小型狛犬や木製・その他製のものまでも含んでいる。その後、小寺氏は、大阪府下全ての参道狛犬を調査した上で、いくらか細部にわたっていた木村氏および奈良文化財同好会による分類ではなく、石工集団にこだ

わらない狛犬形式の大きな流れを明らかにした。

大坂における石造参道狛犬は、個性的で多士済々とも言える様相を示しつつ、天明・寛政期に「個性と覇気に溢れる狛犬が作られた黄金期」⁴⁾を迎える。その後幕末期に向かって周辺地域に狛犬奉納ブームが波及するとともに、狛犬は量産化され形式化していくことになる⁴⁾。

その流れの中で、幕末期まで型として残っていかなかった、いくらか傍流とも言えるグループがある。その中の一つがここでとりあげる龍田神社狛犬の近縁グループである。それは、まず木村氏により鴨高田型としてまとめられた寛政6年(1794)から文化13年(1816)までのもの(田島、御厨・天、鴨高田、野里・住吉、津留彌)である⁴⁾。次いで、奈良文化財同好会は寛政年間のもの(田島、助松、御厨・天、鴨高田、野里・住吉)としてまとめた⁷⁾。木村氏による鴨高田型に、助松を加えて文化期の津留彌を省いた形になっている。一方、小寺氏は、寛政年間ものを対象とせず、津留彌に3狛犬を加えて文化元年(1804)から文化13年(1816)までの4狛犬(桑津天、津堂八幡、柴島、津留彌)を異相の「三角目のけったいな狛犬」とした⁸⁾。小寺氏はこれらをそのユニークさから一人の石工によるものと考えている。なお、この中の柴島(文化11年1814)について、木村氏は別な長瀬型に入れている⁴⁾。それぞれの型やグループは独自に提案され、相互の比較検討はなされていない。

本稿では、これらの狛犬を再整理し、龍田神社狛犬の仲間を尾の特徴と顔から一つのグループとし、尾の特徴により多筋扇尾グループと名付けた。ここに属す狛犬は、田島、助松、御厨・天、鴨高田、龍田、津堂八幡、柴島、津留彌である。これ以外の上記狛犬「鴨高田型・助松型—野里・住吉」及び「三角目—桑津天」は、近い雰囲気を感じさせるが他のグループと考える。

狛犬形状の比較と同時に、同一作者によるものかどうかの検討を行い、本グループの盛衰について考察した。

上記文献の中では個々の狛犬についての情報量が少ないので、本稿では詳しく記載し、比較のために文末に同じ角度の写真を多く提示した。尾の突起の表現は小寺氏に従った。例えば9(8円1炎)とある場合、総数が「9」であり、()内の「8円」は渦のような巻き毛が8個、「1炎」は渦になっていないもの(炎毛あるいは直毛)が1個という意味である。全体の大きさは、奈良文化財同好会¹⁾および小寺氏の報告⁹⁾にあるので省き、小寺氏⁹⁾に従って大・中・小型に分けた。尾については実測し、縦横比(縦/横)を出した。

2. 多筋扇尾グループ記載

毛筋が多い中央が膨らんだ扇尾を持つ(図3参照)。膨らみの程度は、狛犬によって差があるが、いずれもふっくらとした印象である。毛筋は束を形成しながらほぼ尾の中央に平行に向かっている。各毛束はあまり明瞭ではないので多数の毛筋が印象的となる。この毛筋を彫る順番と方向は、線の入り方から判断すると、尾の下からおよび外側からである。毛束の先の突起は9つあるが、その先の多くは大きな渦の巻き毛となり「さざえ」⁴⁾のようと言われる。単に大きいだけでなく、多かれ少なかれ後方に突出するのが特徴である。

顔（図3参照）は、横長の大きな口、鼻から後頭部に向かう隆起、丸い目である。目から後方の耳に向かって隆起があり（ない場合もある一御厨・天の阿）、これが目立って全体に三角形を呈している場合がある。鼻は突出せず平たい。阿吽の両方あるいは片方がうつむいている場合がよくあり、顔は平たい印象があるが、全てがそのようなわけではない。体はずんぐりしている。

2.1 田島神社（図1）

寛政6年（1794）8月。大阪市生野区田島。木村⁴⁾、小寺⁹⁾。

中型。花崗岩。阿吽とも雌雄無し。吽に角有り。阿吽ともややうつむいている。頭部平たく、顔は横長。口は大きく横長であるが、阿では上下に大きく開かない。目の後方隆起は耳まで届き、写真では恐い顔に見えるが全体にかわいい印象である。目は寄り目で、しかめ顔である。目のすぐ後ろに二本の円形の線があると同時に瞳が刻まれている。顎の下は深くなく、顎下巻き毛は下に垂れて巻き、顎下流れ毛の先も丸く膨らみ丁寧な作りである。

前脚は、首からまっすぐ降りている感じであるが、太くしっかりとし、足先は拝観者側がわずかに後および斜めに配置され、微妙な体のひねりが表現されている。背中の鬣（たてがみ）流れ毛は分かれて、それぞれ1～3本の毛筋をもち、先が丸い。

尾は団扇状で、縦横比（縦／横）は阿：1.2、吽：1.3である。突起は阿：9（7円1不明1炎）、吽：9（6円3炎）である。阿の右下の突起は欠けており先が不明であるが、恐らく8円と推測される。阿吽ともに先端が直毛である。突起巻き毛の塊は互いに接し、巻いた毛筋と尾中央に向かうまっ直ぐな毛筋とは連絡していない。毛筋はやや粗いが、中央に向かって幅が細くなり、左右の毛筋は中央で不明瞭な合わせ目を持っている。毛束毎に下から、左右から、彫ったと見られる。

2.2 助松神社（図2）

寛政9年（1797）2月。石工 松屋町 和泉屋由兵衛。大阪府泉大津市助松。奈良文化財同好会⁷⁾、小寺⁹⁾。

中型。砂岩。性別は阿：雄、吽：無し。吽に角有り。阿吽ともうつむかない。頭部を大きく拝観者側に向け振り向く。前足先左右の配置のずれはほぼ無いので、体をひねらず頭部を大きく振り向かせていることになる。体形のバランスは良く、精悍な感じ。頭部平たく、顔は横長。口は大きく横長で、阿では特に下顎が大きく開く。目の後方隆起は耳まで届き、目は大きく丸く、瞳は表現されず、寄り目ではない。目のすぐ後ろに1本の円形の線がある。顎下はやや深くなって、顎下巻き毛は顎に接し、顎下流れ毛は流れながら垂れている。

前脚は、胸からごく自然に出て、力強いリアルな形をもっている。背中の鬣流れ毛は、先はとがって分かれ、それぞれ2本の毛筋をもつ。

尾は団扇状で、縦横比は吽：1.2（阿：欠損）である。突起は、阿：破損のため9個らしいことがわかるのみ、吽：9（8円1炎）である。直毛は上端にある。突起巻き毛から中央に向かう毛筋に毛が繋がっている。毛筋はやや粗い。毛幅は中央に向かって細くなるのではなく、基本的に同じ幅で、下の毛束に隠れるという形である。毛束毎に下から、左右から、彫ったと見られる。中央合わせ目はやや不明

瞭である。

2.3 御厨・天神社 (図3)

寛政9年(1797)9月。大阪府東大阪市御厨。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺⁹⁾。

大型。砂岩。性別は阿：雄、吽：無し。吽に角有り。阿吽ともややうつむく。阿の頭頂部と左肩部分が薄く剥げ、後脚は不明瞭になっている。阿の頭は胸の上に乗っており、大きく左側にせり出さない。頭頂部平たく、顔は横長。表情は阿吽とも田島にそっくりであるが、阿の口は田島よりやや開く。なお阿の顔は、写真(2013年8月)では両耳があるが、2014年8月時点では右耳が欠けている。田島同様に寄り目、しかめ顔だが、目ははっきりと大きく丸い。目の後方隆起は、阿に無く吽のみに有るが、目とは明瞭に区別され、目の後ろに筋はない。顎下はやや深くなり、顎下巻き毛は下に短く垂れて巻き、顎下流れ毛はやや短めで先にひねりがある場合がある。

前脚は、細く華奢な印象を与えるが、自然に胸から出て先細になっている。左右のつま先は明瞭に前後に配置され、拝観者側の足先は斜めに置かれて上体を拝観者側に向ける様子を見せている。背中の鬣流れ毛は、先が立体的にやや丸みを持って分かれる。吽の左側面では特に立体的である。それぞれ1～数本の毛筋をもつが、阿の方が少なめである。

尾は団扇状で、縦横比は吽：1.2(阿：欠損)である。突起は阿：9(8円1?)、吽：9(7円2炎)である。阿の上端は破損により不明、吽の上端は巻き毛でその両脇が直毛となっている。毛筋は細かく、毛幅は中央に向かって細くなり、美しい仕上がりである。下から上に向かって、左右から毛束ごとに毛筋をいれており、中央の合わせ目にジグザグの明瞭な縦筋ができています。吽の方がより細かく美しい仕上がりである。突起巻き毛の塊は互いに接し、巻き毛と中央の毛筋は繋がっていない。

2.4 鴨高田神社 (図4)

寛政9年(1797)9月。大阪府東大阪市高井田元町。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾。拝殿の奥にあり、参道に出ていない。

大型。砂岩。雌雄なし。吽に角有り。阿はややうつむく。頭頂部は盛り上がり丸く、全体に四角い顔の上に丸い蓋を乗せたようである。表情は陰しく恐く、阿の口は助松にやや似て、御厨・天よりも下顎が開く。ただし阿の顔の左側は欠けている。目は寄り目で大きく丸い。目の後方には、後方隆起があり、1本の円形の筋がある(吽：右側不明瞭)。顎下はやや深く、顎下巻き毛は(よだれかけのために写真では分からないが)比較的大きく、顎の下からすぐに巻いている。顎下流れ毛は、先がやや丸く盛り上がりしている。

前脚は細いが、自然に胸から出て先細になる。左右のつま先は明瞭に前後に配置され、拝観者側の足先は斜めに置かれて、上体を拝観者側に向ける様子を見せている。それに加えて阿吽ともに前正面から見ると明瞭に、頭部が胸より拝観者側にせり出している。背中の鬣は先が分かれて尖って曲がり、数本の毛筋がある。その毛筋は吽の方が多く毛先も立体的である。

尾は団扇状で、縦横比は阿：1.3(先端少し欠)、吽：1.3である。突起は阿：9(9円)、吽：9(9円)で全て巻き毛である。吽の尾の根元から上端までの中心線はやや斜めになっている。毛筋幅は、中央に

向かって同幅に近くわずかに細くなる程度である。毛束ごとに左右から筋を入れてあり、中央の合わせ目の仕上げが非常にきちんとして明瞭である。突起巻き毛の塊は互いに接している。

2.5 龍田神社 (図5)

文化4年(1807)4月。奈良県生駒郡斑鳩町龍田。奈良文化財同好会⁷⁾

大型。砂岩。雌雄なし。咩に角有り。阿の顔はうつむかずに斜め前を向くが、咩はややうつむき、頭をかしげている。頭頂部平たく、顔はやや横長な四角である。口は助松や鴨高田のように下顎が下がらないが、御厨・天よりもやや開く。眼は大きく円形で、左右の間が開いて目を瞠っている感じである。目の後方に不明瞭な1本の円形の筋があり(阿はさらに不明瞭)、後方に三角形部分が伸びるが長くない。顎下は深くなり、顎下巻き毛は顎に接し、顎下流れ毛は短めである。

前脚は、細く華奢で、咩では折れて継がれている。顎下からほぼ真直ぐに出て、つま先の左右のずれはわずかである。背中の鬣は全体がまとまっているが先端だけが分かれており、全体が流れるように肩にかかっている。

尾は他のものに比べて縦長で、縦横比は阿：約1.5(幅が概略)、咩：1.6(先端少し欠)である。尾の先の突起は、阿咩とも9(7円2炎)で、上端とその右横が直毛である。咩の先端直毛の先はやや二股となっている。咩の尾の根元から上端までの中心線が明瞭に斜めになっている。突起巻き毛の塊は大きい、相互に接していない。突起の渦から毛筋が流れ出てくる様子を全ての巻き毛の塊で表現しているために巻き毛間が開き、尾の全体が縦長になっているのである。毛筋の入れ方は、阿の下の方では左右1本ずつ中央で合一し、さらに上では毛束ごとに左右の合わせ目ができている。咩の場合、下から東になってジグザグの合わせ目ができている。毛幅には差があり、突起横から中央に向かって同幅であることが多いが徐々に細くなる部分もある。

2.6 津堂八幡神社 (図6)

文化7年(1810)4月。大阪府藤井寺市津堂。小寺^{8)、9)}。

大型。砂岩。雌雄なし。咩に角有り。阿咩ともうつむかない。阿の頭はほぼ胸の上に乗って大きくせり出さない。頭頂部平たく、顔は龍田と同様の四角であるが、寄り目でしかめ顔である。口の開き方も、阿の左上顎が欠けているが龍田に良く似ている。目は円形で後ろに不明瞭な1本の円形の筋があるが、大きく出ない。顎下は深く彫り込まれ、顎下巻き毛は顎に接し、顎下流れ毛は短い。

前脚は、やや胸の下から出る形をとっているが寛政期のもの程のリアルさを持っていない。左右のつま先のずれは、不明瞭であるが無いわけではない。背中の鬣は先端も含めて全体が平たくまとまり、肩にかかる様子も形式的な表現となっている。

尾は、阿の場合横の突起が欠けているので縦横比が出せないが、やや縦長に見える。咩は阿よりも縦が短く縦横比は1.3である。突起は、阿：不明ながらも推定9(8円1炎)、咩：9(8円1炎)で、上端に直毛がある。阿では、龍田のように毛筋が巻き毛から流れて出る様子が表現されているので巻き毛の塊間に隙間がある。咩では、同様な表現ながら先の突起巻き毛を小さめに表現し、毛筋の流れを工夫して、全体の形を整えている。筋の刻み方も龍田に似て、下の方では左右1本ごとに毛筋を彫り、少し

上で毛束ごとになっている。左右で毛筋が交差してしまっている部分もある。毛幅は幾分広く、先から中央に向かってやや細くなっている。阿咩で比べると、咩の尾で流れるような毛筋がよく表現されている。

2.7 柴島神社 (図7)

文化11年(1814)9月。大阪市東淀川区柴島。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺^{8)、9)}。末社住吉神社前。

大型。砂岩。雌雄なし。咩に角有り。阿咩ともうつむかない。頭はほぼ胸の上に乗っている。頭頂部平たく、顔はやや横長である。阿の両耳、咩の右耳が欠けている。鼻は耳に向かって伸びる部分と一体化し、大きな先端部分で細い線によって表現されているだけである。目は寄り目で小さめで、後方部分の長い三角が目立っている。目は丸く、後ろに筋が2本ある。顔全体の中で目、鼻、口の大まかな領域の形は御厨・天の形に近い。口は大きく、阿では良く開いているが、阿咩とも下唇と上唇のラインが平行でないので、不自然な波打ち方となっている。顎下はやや深めに彫られ、顎下巻き毛は小さく顎に接し、顎下流れ毛は長めで先が立体的に表現され、捻じれている場合もある。

前脚は、阿の両脚がコンクリートで補修されているので、咩を見ると、胸から出て立っている様子が津堂八幡に似ている。つま先は拝観者側の右側がわずかに後ろにあり、斜めに配されている。背中の鬣は先端が一つにまとまっているが、阿では立体的に表現され、咩では平たく肩に乗っているだけである。

尾は団扇状で、縦横比は咩：1.3(阿欠損)、突起は咩：9(8円1炎)で、阿では多くが欠けているので不明である。咩で見ると、突起間は多くの場合接しており、一部に巻き毛から中央へ流れている毛が表現されている。顔がかなり単純化されているのに対し、尾の形は津堂八幡の咩と同様の形と彫り方で、さらに毛幅は狭く、流れるようである。尾の下部では1本ずつの毛筋が左右から来ているが、毛束の下二つ目から上に向かって毛束ごとに毛筋が左右から彫られている。毛幅は突起横から中央に向かって細くなり、中央で左右が合わさる。中央の合わせ目はあるが、鴨高田程のきちんとした線になっていない。

2.8 津留彌神社 (図8)

文化13年(1816)9月。大阪府東大阪市荒川。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺^{8)、9)}。東鳥居近く。

大型。砂岩。雌雄なし。咩に角有り。阿咩ともうつむかない。阿咩ともに頭が拝観者側に大きくせり出している。顔は眉部分以下が正方形で、頭頂部丸く膨らみ、全体としてやや縦長であるためか、人間っぽい。これらの様子は鴨高田に近い。鼻はきちんと表現され、耳に向かって伸びる部分は柴島程目立たない。寄り目でしかめ顔である。目は小さく丸く、後方隆起が目立つ。目の後ろに筋が2本ある。阿の口は大きく開いている。顎下はやや深めに彫られ、顎下巻き毛は顎に接し、流れ毛は垂れている。

前脚は、横から見ると首から下に出ているが、肩に関節らしい表現があり、自然な雰囲気を出している。しかしつま先のずれと拝観者側への斜め配置は見られず、左右同じように前を向いている。背中の鬣は先端が一つにまとまり、平らな表現である。

尾は団扇状で、縦横比は阿：1.1、咩：1.3である。咩の縦軸は明瞭に斜めである。尾の先の突起は、阿

畔ともに9（9円）で、直毛は無い。突起巻き毛の塊は多くが接しており、一部に巻き毛から中央に向かう流れの毛がある。毛筋の幅はやや広く、先から中央に向かって細くならず並行で、しかも左右から1本ずつ中央で合わさっている。

3. 全体の特徴と制作者

3.1 全体の特徴

多筋扇尾グループの第一の特徴は、尾の周辺部に大きな「さざえ」のような巻き毛が配置され、そこから多数の毛筋が中央に向かって伸び、細かな骨をもつ団扇のように見えることである。尾の毛束の境界は、他の尾のタイプと比べて不明瞭なために、一層大きな団扇のように見える。第二の特徴は、主に口、鼻、目から由来する独特の表情である。口は大きく、上下唇は多く波打ちながらも、全体に真直ぐか緩いカーブを描いており、角をもって曲がっていることは無い。鼻は平たい。目は丸く、全体に中央に寄っていることが多いためにしかめ顔になっている。この口、鼻、目がいっしょになって、独特の顔つきを形成している。龍田は、目が寄っていないので、ひょうきんさがあるが、大きな口、丸い目、平たい鼻と頭を持ち全体として同じ印象の顔つきである。

このグループは大きく寛政期と文化期の2群に分けられる。寛政期のものの特徴は、背中の鬣の流れ毛の先が立体的であり、いくつかに分かれていることである。一方文化期のものでは、鬣の先は一つになっており、多くは立体的ではなく平に表現されている。ただ、龍田では、まだ先が少し分離していることと、柴島の阿の鬣の先が立体的になっている点がやや例外的である。

全体に、寛政期のものは脚の表現を始めとして、全体が生き生きとして活力があるのに対し、文化期になると、徐々に形式化が進んでいる。その中で、尾の表現については、寛政期のものに肉薄しようとする努力が伺える。

3.2 似ているが多筋扇尾グループに属さない狛犬

3.2.1 野里・住吉神社（図9）

寛政11年（1799）8月。大阪市西淀川区野里。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺⁹⁾。

大型。花崗岩。雌雄なし。畔に角あり。顔は確かに田島（寛政6年1794）をモデルにしているようである。顎の下の巻き毛も田島に似ている。しかしながら、尾の突起は6（6円）で、その先は小さく巻いて前に向かっていて。多筋扇尾グループの尾は巻き毛の塊が大きく、しかも後方に明瞭に出るという特徴を示している。尾が異なるという点で、野里・住吉は多筋扇尾のグループに入れられないことにする。

多筋扇尾タイプの狛犬には力があり、この尾の細かい多数の筋を平行に入れることは難しい作業であると考えられる。そのために多筋扇尾タイプを制作した石工はいずれも相当な腕をもった石工であると考えられるが、この野里・住吉の作者は、顔をまねたものの、全体の表現が稚拙で及ばない。

3.2.2 桑津天神社 (図9)

文化元年 (1804) □月。大阪市東住吉区桑津。小寺⁸⁾、⁹⁾。境内の八幡宮前に鎮座。

小型。砂岩。雌雄なし。尾の突起は阿:7 (6円1炎) で、吽は突起が破損しているために不明だが、阿と大きく異ならないように見える。突起の先の巻きは小さく、後ろに飛び出てこない。尾の後面は膨らんでいるが、毛筋は多くない。突起の数が少ないことと毛幅そのものが広いことの両方による。顔の表情はやや似ていると言えなくもないが、目がアーモンド形に表現されている点が異なる。このアーモンド形の目を持ち、同様の尾を持っている狛犬は他にあり、文化期以降多くなるようである。桑津天は尾が異なることにより、多筋扇尾グループからはずすことにする。

こちら、吽の表情にはなかなか味わいがあるというものの、狛犬の姿全体から見ると石工の腕は多筋扇尾制作者達と比べるとかなり落ちるといわねばならない。

3.2.3 小山・産土神社 (図9)

文化15年 (1818) 5月。大阪府藤井寺市小山。奈良文化財同好会⁷⁾、小寺⁹⁾。境内社前。

中型。花崗岩。阿雄。団扇のような扇尾で、尾の突起は阿吽とも9 (8円1炎)、毛の筋は中央に向かっており、なんとなく多筋扇尾をモデルにしている事が伺える。しかし、筋の数が少ないため粗いことと、突起巻き毛の大きさも小さい。一番異なる点は顔である。口が、口角の近くで大きく折れ曲がっているために、多筋扇尾グループの特徴的な大きな口になっていないこと、鼻が平でなく先に出ていること、鼻から耳に向かって三角の隆起が見られないことである。また下顎が小さく、目はアーモンド型である。このような顔をもった狛犬は幕末期に見られる別の一つのスタイルである。

この狛犬は尾について多筋扇尾をまねているが、全体として他にあるタイプであるとする。やはり石工の腕は落ちる。

3.2.4 小山・産土神社 (図9)

寄進年不明。石工 東堀 石屋六兵衛。大阪府藤井寺市小山。木村⁴⁾、奈良文化財同好会⁷⁾、小寺⁹⁾。本殿正面。

大型。花崗岩。雌雄無し。寄進年は不明であるが、木村氏は文化年間初期⁴⁾、小寺氏は弘化年間 (1844-1847)⁹⁾ と推定している。形は間違いなくすぐ近くの津堂八幡 (文化7年1810) をモデルにしており、似ている。特に尾は、団扇のような扇尾で、突起は阿吽ともとりあえず9 (9円) である。突起の巻き毛は明瞭に巻かないものもあり (特に阿)、巻き毛であるかどうかの判定に苦しむ。尾の毛筋は多いが、全て尾の下辺中央に向かっており、中央部に左右の毛筋が合わさった縦筋が無い。顔は、目が丸いが、口角近くで口が折れ曲がっているためにやや表情が異なる。それにより、似ているがやはり異なるものとする。全体に形式化が進んでいる。

3.3 制作者

多筋扇尾グループ制作者達は、いくらか上下があるが、全体として相当腕のある石工達だと言える。作りの細部までが細やかであり、何よりも全体として狛犬に力がある。この明瞭な特徴をもったグルー

ブの作者が同一かどうか、あるいはこの中に何人かの石工が関係しているのかを知ることは、狛犬を理解する上で重要なことと言える。従来、狛犬の類似性から木村氏⁴⁾と奈良文化財同好会⁷⁾は、御厨・天と鴨高田を同一作者のものとして推定している。小寺氏⁸⁾は文化期のものについて、桑津天、津堂八幡、柴島、津留彌を同一作者と考えた。これらについて、細部の比較から同一作者かどうか疑問に思う部分がある一方、作者自身が意図して変化する部分と、固有の変化しない部分の見極めが難しい。そこで異なる方向から迫ってみようと思う。

丹波佐吉の狛犬を追跡して分かった事の一つは、狛犬の台座等にかかれている文字が、特別な場合を除き、石工の手になるものであるらしいということである。石工は彫るだけではなく、基本的に文字も書くようである。特に正面の「奉獻」や「奉納」の文字はシンボルとなり、ブランドとなっていた可能性がある。佐吉の狛犬で、佐吉自身が文字を彫っていなくても、佐吉が書いたと思われる例があり¹⁰⁾、¹¹⁾、揮毫を依頼されたと思われる。また佐吉の「奉獻」の拓本をとった例はまだ1例しか発見されておらず、勝手に写すことはできなかったのではないかと考えられる¹⁰⁾、¹¹⁾。この書かれている文字を比較する事により、石工が同一であるかどうかをここで検討してみたい。

各狛犬の「奉獻」を図10に示した。龍田の場合「奉獻」が無いのでここには示されない。いずれもこのグループ以外の狛犬と比べると、基本的によく似た文字である。これらを比較するに当たって、柴島との関係から阿吽両方のものを示している津堂八幡が参考になる。特に「献」が阿吽でかなり違うことがわかる。しかし、左払いにこの筆者の特徴が表れており、左払いはその人の特徴が出やすいと考えられる。

その上で、各「奉獻」を詳細に見ると、まず田島、助松、御厨・天の「献」と鴨高田以下の合計4件の「献」とで、字体が異なることがわかる。1画目の横棒と2画目の縦棒の関係と偏の中にある「口」の上に1本の横棒があるかどうかである。前群3件の中で、「奉獻」はよく似ているが微妙に違う。「奉」・「献」にある3つの左払いの入り方と伸び方が、三者で異なると見える。しかし、微妙でありこの文字が同一人物によるかどうかについては、ここでは保留する。

後群4件の中では、鴨高田と津留彌の「奉獻」全体が一致する。これは津留彌制作時、鴨高田を拓本で写したと言えるだろう。狛犬自体も、津留彌は鴨高田の写しと見ても良い。この間19年の間隔があり、さらに両者の狛犬には大きな技術的隔たりが見られ、同一人物とは考えられない。何らかの理由で写す事を許されたと見る事ができる。残った津堂八幡と柴島では特に吽間で「奉」が似ている。「献」はやや左払い部分で異なるように見えるが、決め手に欠けるようである。龍田の「奉獻」が無い事も合わせて、さらにその他の文字で比較を行ってみよう。

まず、寛政期の4件の文字であるが(図11)、田島の「寛政」が見分けにくいこともあって、その他の部分を加えた。文字の一つ一つでは比べにくいのが、全体のまとまりから見ると、明らかにこの4件の書を書いた人の異なる性格が伺える。何より鴨高田では、文字が端正であり、行は真直ぐ同間隔で書の手本のような雰囲気である。この几帳面な感じは狛犬にも現れており、その尾の多数の毛筋の合わせ目の確かさは他の追随を許さない。またいいかげんを許さないという気性がおそらく狛犬の怖い顔にも出ているような気がする。

それに対して、御厨天の作者はなかなか自然体な人物と見える。助松の作者(石工 松屋町 和泉屋

由兵衛)は穏健な文字で、田島の作者は「日野屋仁兵衛」がきちんとした文字に見えて、「大坂願主」は斜めになっている等やや癖がある。この文字を見てから「奉献」を改めて見ると違いが確かにあると思われる。

つまり寛政期の4件の狛犬は、断定しにくいが4人の異なる人物によって制作されたと考えて良いのではないだろうか。

一方、文化期の場合、「文化」の文字だけでも違いが見えてくる(図11)。簡単な文字ではあるが、筆使いが4様である。龍田は、大変特徴的な文字で他とは明らかに異なる。津堂八幡は柔らかな、柴島はしゃっきりした、津留彌は大人しい筆使いである。文化期の4件もほぼ異なる石工の手になっているのではないかと考えられる。なお、津留彌は、鴨高田程の端正さは無いが、全体に文字の並べ方が丁寧である。

結局、この特徴的な狛犬8件は、さらに検討が必要ではあるが、全て異なる人物の手になると考えたい。

4. 多筋扇尾グループの盛衰

全部別の石工であったとすると、寛政期と文化期にわたって8人の石工が変わった狛犬にチャレンジしたことになる。他の狛犬と比べて「変わった」と評価しているが、実は非常に高度な技術を駆使しているという点が良い。尾だけを見ても大変手間のかかるものである。またそれぞれの作者は、この狛犬をいくつも作らなかった可能性が出てくる。長い時間の間に失われた可能性もあるが、このスタイルは大変制作が難しく、石工にとってチャレンジングなものではなかったのではないだろうか。腕に磨きをかけて、一世一代の気概で挑んだ狛犬ではないだろうか。実際唯一わかっている助松の作者、松屋町和泉屋由兵衛は小寺氏のリスト⁹⁾によると他に銘のある狛犬を残していない。松屋町は当時賑わった大坂の石屋町の一つである⁷⁾。

奉納者がぜひこのスタイルで、と願った可能性もある。いずれにしても、それぞれの石工の技量は高い。各人この狛犬に至るまでに多くの狛犬を作ってきたに違いない。それらは、この多筋扇尾のスタイルではなくもっと別な型の狛犬であるということになる。またこの狛犬を作った後も同様である。

4.1 始まり—田島

このスタイルの初めて大阪市生野区にある。もっと以前のものが失われた可能性もあるが、この狛犬自体が子どものように可愛らしく、初々しい。首周りの流れ毛を始めとして各部分が、生き生きとしている。しかし尾の先端が簡単であったり、前脚は首から出ているようでありながら、左右のひねりがきちんとあったりと、混在しており、やはりオリジナルなものを作ったという感じが出ているのである。この田島をもって多筋扇尾スタイルが始まったと考えたい。そしてこの顔と尾が、このスタイルのシンボルとなったのではないだろうか。

4.2 頂点の手前—助松

寛政9年2月奉納で、先の田島から3年後、次の2件には7ヶ月先行するだけである。助松は、尾の

作りで次のグループにやや及ばないが、体の均整は最もとれており、精悍な感じが出ている。拝観者側への向き合い方は、足をずらせて上体をひねるというよりは、頭部を大きく拝観者側に向けてせり出すという方法をとっているのが特徴である。また吽の顔はこのグループらしいが、阿の顔は少し異なるイメージである。このような口を開いた精悍な感じの狛犬は他にあり、そちらとの関係を検討する必要があるだろう。奉納場所は泉大津市で、他とはやや南に離れている。作者は和泉屋由兵衛。

4.3 頂点—御厨・天と鴨高田

ともに寛政9年9月奉納で、両者はほぼ並行して作られたものである。さらに両神社は東大阪市内でもかなり近く、互いに意識していた可能性もある。御厨・天の作者は、田島をよく継承しながらも、もっとリアルに、もっと高度な技で作りを上げた。一方、鴨高田の作者は、田島の滑稽味のある表情ではなく、恐い顔を狙っている。なぜか頭の上部は平ではなく丸い。表情の違い以外に異なる点は、阿の頭部が、御厨・天では胸のほぼ真上に乗っているのに対し、鴨高田ではぐんと拝観者側に出ていることである。脚、尾のリアルさ、精密さは両者良い勝負であり、この2件が、それぞれの個性を発揮しつつ多筋扇尾スタイルの最高峰となっていると言える。ともに若さと勢いがあり、拝観者側への向かい方にも、足の配置から高度な技が発揮されており、この時期の大坂狛犬界に傑出した二人と言って良い。

ともに「阿」像に傷みが出ているのは誠に残念なことである。

助松と合わせて、寛政9年はこのグループの最盛期と言えるだろう。

4.4 余韻—龍田

助松、御厨・天、鴨高田から10年を経て大和川を遡った奈良県斑鳩町龍田神社に多筋扇尾スタイルの狛犬が奉納された。これは先行する高度な狛犬に迫ろうとしたと考えられる。華奢な前脚は、御厨・天と鴨高田に通ずるものである。しかし前足の配置のずれは少なくなり、尾の表現は流れるようにはいかない。一方で、突起巻き毛と中央に向かう毛筋との間に連絡をつけようという工夫をしている。それは助松ではきれいに制作されているが、龍田ではその工夫のためにやや縦に間延びした尾になった。助松、御厨・天、鴨高田のどれをモデルにしたかと考えると難しいが、どれかといえば鴨高田だろうか。しかし、もっと穏やかな、平凡の良さを示すような雰囲気醸している。

寛政期の3件に比べるとやや技術的に落ちるものの、この狛犬は、狛犬が形式化していく流れの中で、まだ前時代の生きた狛犬の香りを残している。それぞれに若々しさを持っていた寛政期の狛犬に比べて、龍田には中年の哀愁が漂い、独自の境地を開いている。次の津堂八幡以下を作った石工達と比べて、この狛犬の作者は一世代前の寛政期の匂いを残していると言えるだろう。

4.5 新時代—津堂八幡、柴島、津留彌

津堂八幡（藤井寺市）は龍田から3年後、柴島（大阪市東淀川区）は津堂八幡から4年後の奉納である。形から津堂八幡は龍田と鴨高田を、柴島はおそらく御厨・天を参考しているように思われる。ともに最も近い場所である。そして体の全体に形式化が見える。前脚もこれまで程の華奢な脚ではなく、前から見るとかなり真直ぐに立っているように見える。しかし、細部は丁寧であり、いい加減な仕事ぶりではない。特に尾

には力を入れており、美しいできばえである。津堂八幡の阿の尾は、まだ龍田のように縦長で、左右の巻き毛間に隙間が見えるが、吽の尾になると縦の長さがやや短くなり巻き毛はうまく接して、毛は流れるようになっている。更に4年後の柴島では阿吽とも細かな毛筋である。左右からの毛筋の合わせ目は、鴨高田ほどの精密さにはなっていないが、全体として尾のできばえは2件ともかなり良いと言える。

柴島では、さらに阿の背中に流れる鬣の先を美しく整えており、相当な技術とこだわりを持った石工の作と思われる。しかるに、柴島の狛犬の顔はあまりにユニークというか、変である。この顔の由来を考えると、吽の顔の正面から見たところが御厨・天に大変よく似ていると言えそうである。御厨・天の顔の細部を無視して、頭と目の周辺区画、鼻を含む区画、口の区画を大まかに区画化すると柴島の顔になることに気づく。この作者は顔の区画化をした後、細部は線刻だけで済ませてしまったと考えたと、このような顔になるだろう。顔の仕上げはきちんとしてあるので、なぜ狛犬としては目に付く顔の部分を区画化と線刻にしたのかについては不明である。なんとかユニークさを出したかったのだろうか。木村氏に「駄作」⁴⁾と一刀両断されているが、技術は低くない。ユニークさの光芒を放っていると言えるだろうか。

津留彌(東大阪市)は、全体に鴨高田の模刻と呼んで良い形状である。頭部が拝観者側にせり出しているのも鴨高田とよく似ている。奉納は鴨高田から19年後となる。全体が津堂八幡や柴島より一層形式化しており、文化期の終わり頃の狛犬の様子を示している。さらに頭が丸く出ているために縦長な顔になり、何か人間くさい感じになっている。このスタイルの特徴である尾の筋の刻み方もかなり粗い。

津留彌神社は当時、現在よりも約1km西の布施戎神社の地にあった(布施戎神社境内の説明板による)。それでも鴨高田神社からは隣村といった立地である。狛犬を奉納するにあたり、近くの立派な狛犬にならったものを奉納者が希望したのかもしれない。また石工がチャレンジしてみたかったのかもしれない。それでも「奉献」を拓本できたのは、石工間に相当な関係があった(同じ店の跡継ぎである等)など、何かがあったと考えられる。

いずれにしても、この津留彌をもって現在残っているこのスタイルの狛犬は終わりとなる。このスタイルはよく見ると手間がかかる難しそうな狛犬である。当時の、型にはまった狛犬へ(それはつまり早く、安くできる)という大きな時代の流れの中で、これを作ろうというチャレンジ精神を示す石工は文化期の終わり頃、登場しなくなったことになる。ここに挙げた文化期の狛犬作者達は、そんな時代の流れの中で、精一杯に作ったのであり、筆者も形式化が見えるという評価をしているが、それはこのグループの中でのことであり、同時代の中では難しい狛犬にチャレンジした腕に覚えのある石工達だったに違いない。

5. おわりに

独特な形と雰囲気をもっている龍田神社狛犬の仲間達を見つける事ができた。この狛犬は尖った雰囲気を持たず、うつむき、頭をかしげている吽の背中からは哀愁が漂っている。しかし、世の事物に対して率直な驚きの心を持っている表情である。この狛犬は、大坂の浪花狛犬が最も輝いた天明・寛政期に頂点をもつグループの文化期への過渡期にあるものということがわかってきた。狛犬全体としても文化期に入ると形式化が進んでいくのだが、この多筋扇尾グループの中だけでもその流れが明瞭に見える。

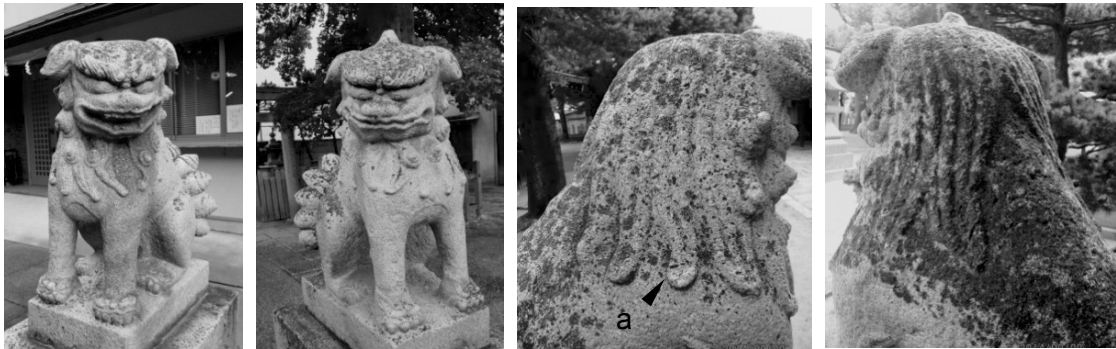
このグループの作者は、狛犬によっていずれも異なり、それぞれ腕を持った石工ではないかと考えられる。さらにはっきりさせるために、またそれぞれの石工がどんな経過をもってこのスタイルの狛犬にチャレンジしたかを知るために、他の狛犬を検討したい。また形式的狛犬全盛期の幕末に名人とうたわれた丹波佐吉がこだわった形が、寛政期以前の狛犬には明瞭に認められ、彼のこだわりのルーツも窺えるのである。

6. 謝辞

比較のために大阪府にある他の狛犬もいくらか観察したが、その観察と今回問題の狛犬の調査にあたって、小寺慶昭氏によるリスト「大阪府の参道狛犬」に助けられる事が非常に多かった。お譲りいただいた小寺慶昭氏に心から感謝の意を表する。

引用文献

- 1) 奈良文化財同好会 (2014再刊) 狛犬の研究. 40+140pp. 奈良文化財同好会.
- 2) 木村茂 (1970) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第1報) —年代不明の狛犬について—. 大阪教育大学紀要19: 第I部門 163-180.
- 3) 木村茂 (1971) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第2報) —年代不明の狛犬について (続) —. 大阪教育大学紀要 20: 第I部門 99-116.
- 4) 木村茂 (1972) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第3報) —元文元年より文化14年まで—. 大阪教育大学紀要21: 第I部門 73-93.
- 5) 木村茂 (1975) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第4報) —文政元 (1818) ~天保14 (1843) —. 大阪教育大学紀要 24: 第I部門2号 113-132.
- 6) 木村茂 (1977) 大阪近郊の石製狛犬の研究 (第5報) —弘化元 (1844) ~慶応4 (1867) —. 大阪教育大学紀要 26: 第I部門1・2号 25-36.
- 7) 奈良文化財同好会 (1999) 狛犬の研究—大阪府の狛犬—. 165pp. 奈良文化財同好会.
- 8) 小寺慶昭 (2003) 大阪狛犬の謎. 276pp. ナカニシヤ出版.
- 9) 小寺慶昭 (2003) 大阪府の参道狛犬 参道狛犬調査報告書1. 108pp.
- 10) 磯辺ゆう (2007) 丹波佐吉の狛犬1—記載. 奈良文化女子短期大学紀要38: 19-30.
- 11) 磯辺ゆう (2007) 丹波佐吉の狛犬2—考察. 奈良文化女子短期大学紀要38: 31-42.



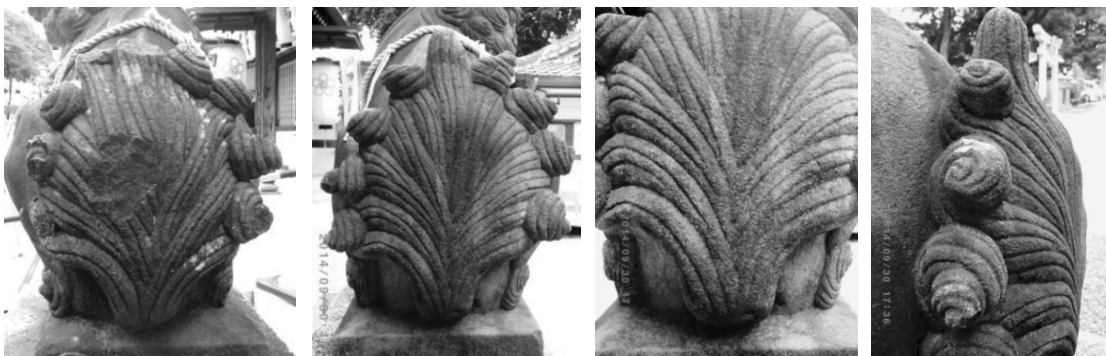
阿

阿

吽

阿

図1 大阪市生野区 田島神社 寛政6 (1794)年
 a:鬣流れ毛 b:顎下巻き毛 c:顎下流れ毛
 尾以外は全て左-阿、右-吽



阿

吽

吽

吽

図2 泉大津市 助松神社 寛政9 (1797)年 2月
 a:鬘流れ毛 b:顎下巻き毛 c:顎下流れ毛(図3以下同様)。
 尾以外は全て左-阿、右-吽。



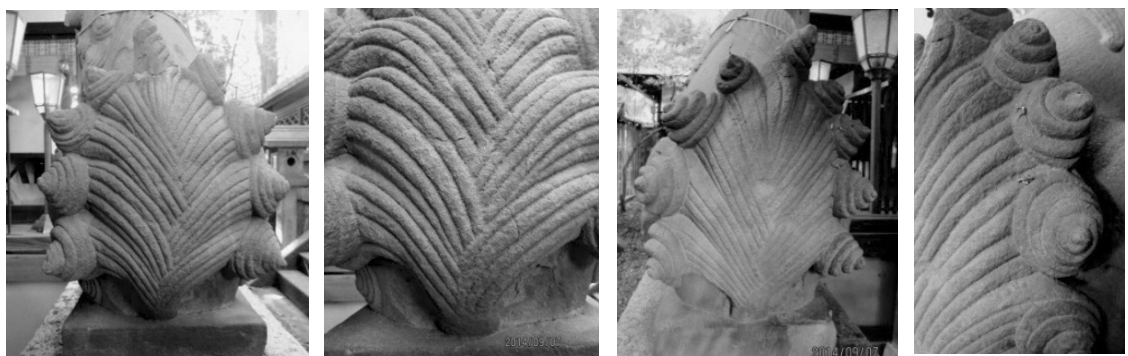
阿

吽

阿

吽

图3 東大阪市 御厨・天神社 寛政9 (1797)年 9月
尾以外は全て左-阿、右-吽



阿

阿

吽

吽

図4 東大阪市 鴨高田神社 寛政9 (1797)年 9月
尾以外は全て左-阿、右-吽



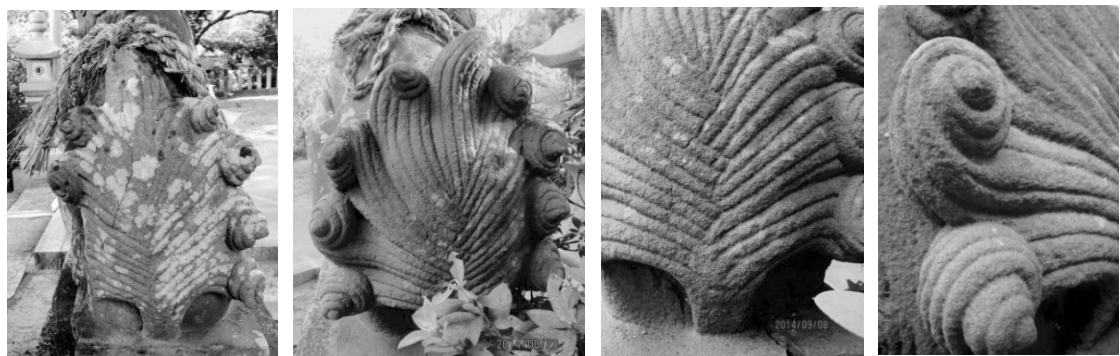
阿

阿

吽

阿

図5 斑鳩町 龍田神社 文化4 (1807)年
尾以外は全て左-阿、右-吽



阿

吽

吽

吽

図6 藤井寺市 津堂八幡神社 文化7（1810）年
尾以外は全て左-阿、右-吽



阿

吽

吽

吽

图7 大阪市東淀川区 柴島神社 文化11 (1814)年
尾以外は全て左-阿、右-吽



阿

阿

吽

阿

图8 東大阪市 津留彌神社 文化13 (1816)年
尾以外は全て左-阿、右-吽



大阪市西淀川区 野里・住吉神社 寛政11(1799)年



大阪市東住吉区 桑津天神社 文化元 (1804)年



藤井寺市 小山・産土神社 文化15 (1818)年

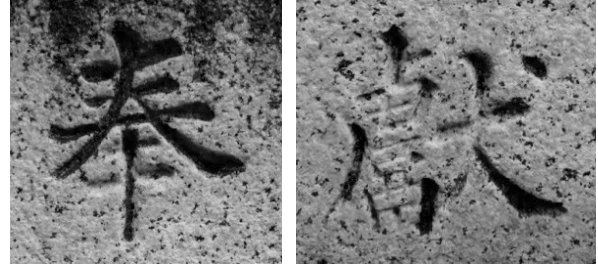


藤井寺市 小山・産土神社 寄進年不明

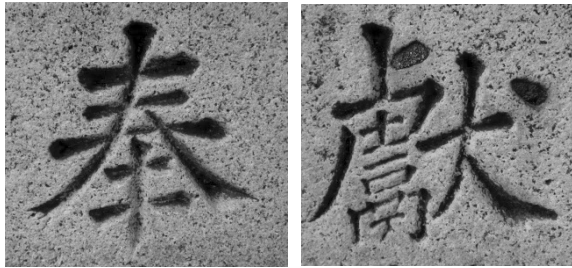
図9 多筋扇尾グループに入らない狛犬



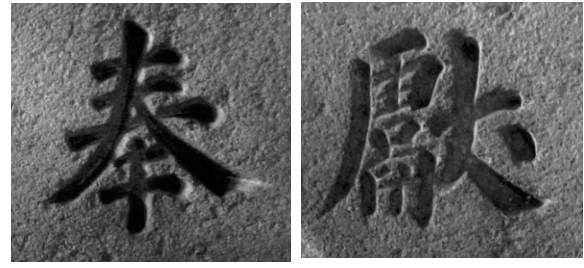
田島神社 寛政6 (1794) 吽



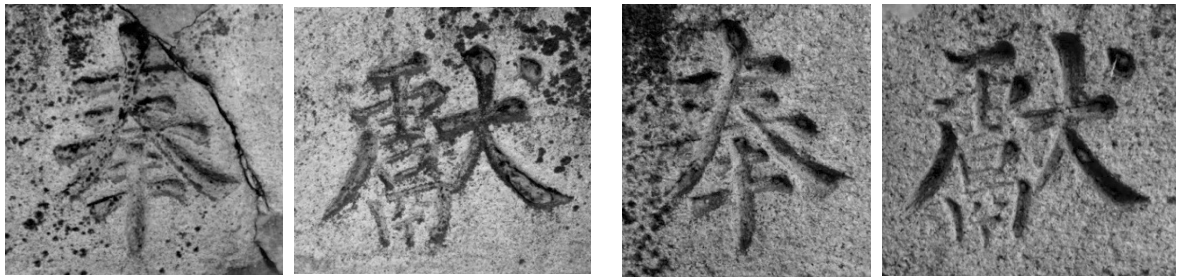
助松神社 寛政9 (1797)年2月 阿



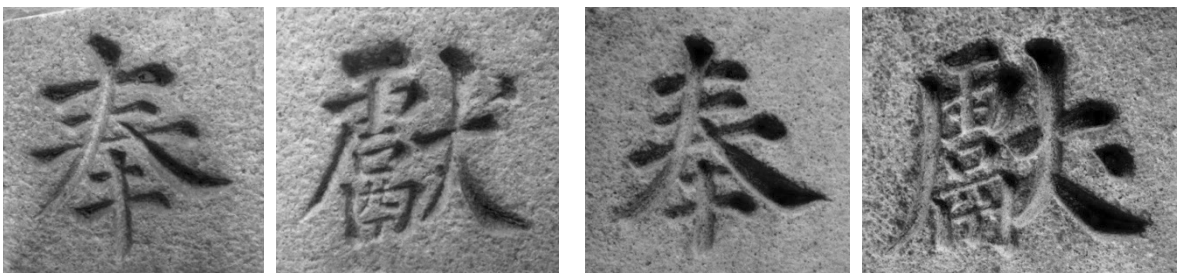
御厨・天神社 寛政9 (1797)年 9月 阿



鴨高田神社 寛政9年 (1797) 9月 吽



津堂八幡神社 文化7 1810 左-阿、右-吽

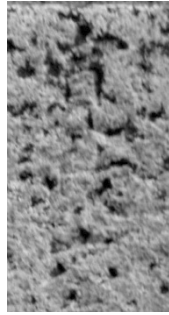


柴島神社 文化11 (1814)年 奉-吽、献-阿

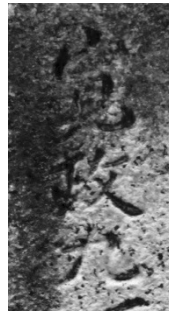
津留彌神社 文化13 (1816)年 吽

図10 「奉献」

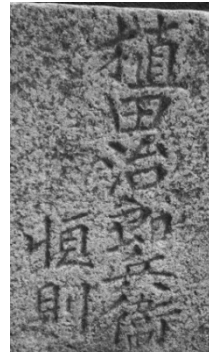
柴島神社では他の石造物により「奉献」の全体を撮影できないため、阿吽から一文字ずつ撮影した。比較のために津堂八幡神社の「奉献」を阿吽とも示した。
龍田神社には「奉献」がない。



田島神社 寛政6 (1794)



助松神社 寛政9 (1797)年2月



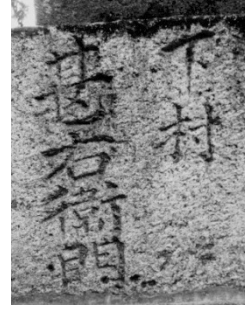
御厨・天神社
寛政9 (1797)年 9月



鴨高田神社 寛政9年 (1797) 9月



龍田神社 文化4 (1807)年



津堂八幡神社 文化7 (1810)年



柴島神社
文化11 (1814)年



津留彌神社 文化13 (1816)年

図11 その他の文字